



庭で布を織っているのが、グループリーダーの一人、フランシスカさん(左)。「日本人のボランティアから多くのことを学んでいます」

「女性たちが技術を得てきて、わかっていく姿を見るのがうれい。自分の力で生活を変えていくんだ」という強い意志を感じます」と山中さん。三代にわたるJICAボランティアの熱意が今、この土地に大きな花を咲かせている。

家事の傍ら、布を織ってお土産物を作り、販売している。しかし、穴あきやほつれなど商品の質が低い。観光客の「欲しい!」ものが生み出せていないのだ。

そこで、山中さんの前任の青年海外協力隊員とシニア海外ボランティアが、織物の染料の仕入れから色落ちしない染色技術までを指導。そして2011年、3代目として山中さんが赴任した。「2人のボランティアの指導のおかげで、女性たちは質の高い織物を作れるようになっていました。次に必要なのが縫製技術でした」と山中さん。ボランティアからボランティアへ、支援のバトンが引き継がれた。

女性たち自身で生活を変えるために

観光客が「欲しい!」と思うお土産物を作るには、まずは品質の向上から。穴あきやほつれがない商品を作る技術力を高めるため、山中さんは市内の15の女性グループを巡回して講習会を開くことに。ミシンを使って、ワンピースなどの洋服やバッグ、ポーチ、帽子などの作り方を教えている。

「女性たちはほとんど年上ですし、赴任したばかりのころは現地の言葉が理解できずに苦労しました」とにかく自分の技術を見てもらうしかない。山中さんは根気強く、不良品を見分けて直す方法を実際にやってみせた。そんな彼女の姿を見て、次第に頼ってくる人が増えてきた。講習会の参加者の一人、セレスティナ・バスケスさんは、「最初は何も縫えなかったけれど、ヒロコが丁寧に教えてくれたおかげでいろんな商品を作れるようになった」とうれしそうだ。

「女性たちが技術を得てきて、わかっていく姿を見るのがうれい。自分の力で生活を変えていくんだ」という強い意志を感じます」と山中さん。三代にわたるJICAボランティアの熱意が今、この土地に大きな花を咲かせている。

「女性たちが技術を得てきて、わかっていく姿を見るのがうれい。自分の力で生活を変えていくんだ」という強い意志を感じます」と山中さん。三代にわたるJICAボランティアの熱意が今、この土地に大きな花を咲かせている。



[上]人気商品の一つがバッグ。右上のバッグに飾りとして端切れの花を付けたのは現地の女性たちのアイデア
[下]ポンチョは、マフラー付きやフード付きなど、デザインのバリエーションを増やした



[右]講習会でショルダーバッグの作り方を教える山中さん。メンバーの家や商品を販売するお店の一角で行うことが多い
[左]縫い方の手本を見せながら指導。「女性たちがものづくりを楽しみ、向上心を持ってくれるようになりました」

グアテマラ from GUATEMALA

青年海外協力隊

暮らしを変えるものづくり

ミシンを使って、魅力的なお土産物を作れるようになってほしい。青年海外協力隊の山中大子さんは、日本でデザイナーとして働いた経験を生かし、グアテマラの女性たちとものづくりに取り組む。

ボランティアがつなぐ支援のバトン

カタカタカタ。部屋の中に鳴り響くミシンの音。赤、青、緑と、色鮮やかな織物を使い、女性たちがバッグやポーチを作っている。

グアテマラ西部に位置するサンファンラグラーナは、マヤ文明の伝統を受け継ぐ人々が多く暮らす町。植物や昆虫などからとれる天然染料を使う昔ながらの織物は、この地に代々伝わる名産品だ。

この織物を活用した「ものづくりに奮闘する青年海外協力隊員がいる。」

「マヤ民族のモチーフを使ったらどう?」

「ポンチョにフードを付けてみようか?」

現地の女性たちと商品のデザインを話し合っているのは、服飾隊員の山中大子さん。日本のアパレルメーカーでデザイナーとして経験を積み、生地やデザイン、パターン、縫製などの専門知識を身に付けた。「自分が作った洋服が商品になって、お客さんが買ってくれる。それが大きな自信になりました」。貧困に苦しむ開発途上国の女性にも、技術を身に付け、自分で生活を変えられることを知ってほしい。そう思い、協力隊への参加を決めた。

サンファンラグラーナは、世界一美しい湖とも言われるアティトラン湖のほとりがある町。年間を通じて、国内外から多くの観光客が訪れる。

この地の女性たちは、農作業や



多くの観光客が訪れるアティトラン湖